

平成30年度 第1回徳島県文化創造審議会 議事録

I 日 時

平成30年8月30日（木）午後3時30分から午後5時まで

II 場 所

徳島グランヴィリオホテル1階ヴィリオルーム

III 出席者

【委 員】20名中16名出席

桐野豊会長、吉田和文副会長、阿部曜子委員、大井美弥子委員、小笠原仁美委員、久次米順子委員、佐々木尊委員、佐藤勉委員、鈴木アヤ子委員、多田愛委員、板東久美委員、藤原奈穂委員、古本幸委員、森恵子委員、大和あゆみ委員、四十宮隆志委員

【徳島県】

飯泉嘉門徳島県知事、板東安彦県民環境部長、森口浩徳県民環境部次長、吉成浩二県民文化課長、木野内敦教育委員会教育文化課長、喜羽宏明県民文化課あわ文化創造担当室長ほか

IV 次 第

- 1 開会
- 2 開会あいさつ
- 3 会長・副会長の選任
- 4 諮問
- 5 議事
 - (1)「徳島県文化芸術推進基本計画（仮称）」の策定について
 - (2)意見交換
 - (3)その他
- 6 閉会

V 議事の概要

（会長）

ただ今の事務局からの説明にもありましたとおり、本日、諮問を受けました「徳島県文化芸術推進基本計画」の具体的な内容については、事務局から示される骨子を踏まえ、次回審議会におきまして、意見交換を行うこととしたいと思います。

最後に事務局から説明があった議論のポイント、「「あわ文化」の振興・発展」「文化芸術の活用」「新たな文化芸術」「次代を担う人材の育成」といった観点から、本日は、委員の皆様の自由な御意見、御提言をいただければと思います。

フリートークで自由な御意見をいただければと思います。どなたからでも結構ですので、参考となるような御意見等がございましたら、何なりとご発言いただければと思い

ます。

最初に私から少し述べさせていただきます。

この審議会は、「文化創造審議会」ということで、「文化を創る」という意味合いも込められております。現代における創造というのは、色んな要素を組み合わせで生み出す、生まれるということが非常に多いです。

例えば、今、世界の企業であるアップルという会社は、iphoneを生産していますが、アップルが新しく作った技術はあまりなくて、いろんなものを組み合わせて、iphoneができるんです。ですから、多様なものを組み合わせることが、非常に重要だと思います。

徳島県には色々な文化があり、それぞれの専門の方は、伝統を高い質で受け継いでいるんですけど、こういう場を通じていろいろな文化にふれあう、お互いに知る、それから、IT技術がどんどん発展してますから、そういうものを使った新しい文化芸術、例えばチームラボのような新しい技術に基づいた創作活動が、徳島県で生まれているわけです。

そういうわけで、いろいろな方がそれぞれ意見を言って、知り合うということが非常に需要ではないかと思います。

どうぞ宜しくお願いいたします。

(委員)

その前に、質問よろしいでしょうか。

先ほどの「資料4」について、回答者数187名、その年齢層の内訳がありましたら教えていただきたいと思います。と申しますのも、私は大学で若い世代に接している関係もあり、もしかしてこの結果は、若者の数が少ないのではないのかなという気が、少ししました。

例えば、問16で「子どもたちが文化に親しむ機会の充実」が一番多かったことは、今回の議論のポイントの最後にもあるように、次の世代へとつなげていくという観点を持った方、そういう世代の回答が多かったのかなと。

若い学生さんであれば、例えば、情報はもうほとんどがSNSですし、反対に新聞を読まない、どうやったら新聞を読むようにするかを、日頃、紙媒体、じっくりと浸透してくる文字文化にも触れるようにということを、学生への指導の一つとしておりますので、そうしたことも含め、結果を受け止める際に、回答をされた方の年齢構成をお知らせ願えたらと思います。

(事務局)

委員の仰られたとおり、若い方のご回答というのは少ない状況です。年代層別にご回答させて頂きますと、20歳未満あるいは20代のような方が約10名、30代40代の方が約60～70名くらい、50代60代の方が約80名くらい、70代から上の方が約30名くらいといった状況でございました。

(委員)

そうすると、この4番にも関わってくるかもしれませんが、今日も公募委員として、若い方がいらっしゃいますが、次世代の声をまた別に聞く機会があっても良いのかなという気がいたします。

(委員)

普段、合唱をしていますと、合唱をしている人たちは自分たちの活動を一生懸命してるんですけど、他の分野にはあまり興味がないというか、合唱の演奏会があれば聞きに行くけどクラシックを聞きに行かないとか、他のジャンルにあまり興味がない状況なのが、私としては残念かなと思っております。

こうした会に参加させていただくことで、横の交流、音楽の他のジャンルとの交流もそうですけど、他の文化等との交流ができれば良いかと、今日は楽しみに参りました。

先日、参加した講演会で、文化についての講師の方のお話で、なるほどなと思った言葉があります。

「文化とは、何を美しいと感じ、どんな町に住んで、どんな生活をしたいかという共通の思い。それが文化です。」というように、その講師の方は仰られていて、私たちは普段、音楽をしてるとそれが文化だと思ってしまいうんですけど、文化というのは、もっと幅広く考えて、もっと身近なものに感じて考えていいのかなと思いました。

県の「第九」にも参加させて頂きましたが、中学生が初めて「第九」に取り組んだり、今まで歌ったことのないような人が初めて「第九」に、何千人もの合唱に参加して感動したと仰っていて、それはすごく意味があることだと思いました。

鳴門の「第九」にも10年くらい関わってるんですけども、鳴門の「第九」の特別なところは、初演の地であるということが、参加している人のベースに必ずあって、上手に合唱、演奏することは、もちろんそれを目標に練習するんですけども、それ以外に運営も、裏方のボランティアとか受付とか、そういったことも全部自分たちで1年かけて計画してまわして行きます。

そういうことをしていると、生活の中に「第九」が密着していて、常にそれぞれが鳴門の「第九」の伝道者みたいな意識を持って生活してる。その人たちのそういう暮らしぶり、それが鳴門の「第九」の文化だなと感じています。そのくらい生活の中に入り込むように感じて、考えていけたらいいなと思います。

(委員)

このアンケートの17の中にも、学校教育における活動機会や学習の機会の充実ということで、パーセントの高い結果が入っているんですけども、中学校も総合的な学習の時間や特別活動とかの中で、地域の方との伝統芸能とか音楽を受け継いで、それを中学生が頑張って繋いでいこうとしている学校も出てきております。

学習指導要領の中に、音楽の中で和楽器を取り扱いなさいということが入っていますので、中学校の中では、和楽器、特にお琴、箏曲部が、それをきっかけで出てきたり、音楽の発表の中に箏曲の発表も増えてきて、数年前に比べて音楽会の中でお琴を扱う、和楽器を扱う学校もずいぶん増えてきました。そういうことも鑑みて、やはり学校教育は大事だなということを、今、改めて感じております。

ただ、総合的な学習の時間であるとか、音楽の授業であるとか、それだけではなかなか難しいので、地域の方やその道のプロ、和楽器であるとか色々なプロの方とも繋がりができると、学校教育の中にもさらに高まりがあるのかなという気がします。

先日、全国の中学校の文化祭がありまして、新野中学校が人形浄瑠璃を発表して参りました。中学生が人形を使って、人のように歩き、動きというところに、全国の中学生が本当に一生懸命に目を見開いて見ている姿を観ていると、改めてまた、阿波の文化を繋いでいかなければいけないということを感じながら、子どもたちと一緒に帰って参りました。小さな学校、少人数の学校ですけど、地域の方と一緒にあって、たくさんの方に支えられながらやっていく姿、そのようなものは県下の中学校にもいくつかございます。

今回、この会で色々な分野の方にお会いすることができますので、そのような情報も頂きながら、学校教育を充実させていくことが大事なのかなと、先ほどの資料を読みながら感じております。

中学校だけでなく小学校は、もっと地域と一緒にあって、獅子舞やお祭りの踊り、そういうことをずいぶんとやってきています。子どもたちが、やらされているんじゃなくて、地域のおじいちゃんやおばあちゃんからお話を聞きながら、楽しくやっているというところがあるので、それをまた中学校で受け継いで、次へと繋いでいくという状況を、教育の中でやっていけたら良いのかなと感じております。

(委員)

行政としては、あわ文化の更なる振興・発展というところにありますように、国も県もそうだと思いますが、市町村もオリンピック・パラリンピックを契機とした文化の魅力発信に、力を入れてるところでして、観光、街作り、国際交流すべてに繋がることで、大変重要なことと考えております。

まだ意見等はまとまっておりませんが、市町村は県の施策に期待しているということで宜しくお願いいたします。

(委員)

今年、「近畿高等学校総合文化祭」が徳島県で開催されるということで、11月10日から、近畿10県がそれぞれ集まって、各部門で日程はそれぞれある訳ですが、交流を深めたり、あるいは発表で近畿からやってくるということとなっております。

その中で最近、芸術分野の部員が、高等学校の方で中々揃わないというところが多々ございます。特に新聞部や合唱部あるいは邦楽部なども、十分な部員の確保ができないような状況がございます。もう少し多くの部員が揃っておれば、もっと豪華なものができるのという思いです。

今回、振興計画を推進基本計画を策定していくにあたっては、色々とアンケート調査が出てきておりますけれども、本県の教育文化を振興していくためにはどのようにしたら良いのか、あるいはまた、子どもたちが芸術文化に親しんでいく素地を、もっともっと徳島県内で膨らませていかなければならないのではないかと、つくづく考えているところです。

(委員)

毎年「能」の公演をしているんですけれども、なかなか集客に苦労します。お客が入ってくれません。でも、今年は「マチ★アソビ」とタイアップして、日本刀を題材にしたアニメを「能」の舞台で取り上げるという話になりますと、「マチ★アソビ」にきているコスプレをした人が沢山お見えになりました。「刀剣」という1つだけで、そういうお客さんが来てくれました。

また、毎年、松竹歌舞伎をやっており、これを2回公演するんですけれども、水曜日なんです。水曜の昼間はお客さんが入らないのではと私は言ったんですけれども、私の予想とは裏腹にチケットは売れているんです。昼間の1番いい席から売れていく、それで夜が残るんです。なんでかなと思ったら、昼時間があるお金を持った人がいらっしゃるようで、70歳を過ぎたような方がたくさん来るんだろうと思うんです。

だから、若者育成も大切なんですけど、今は徳島県も75歳以上の人が3分の1にもなろうということで、そうした視点も大事なのではないかと思います。

(委員)

先ほどアンケートで、年齢のことについての質問がございました。

私は、それとともに地域一斉で県下くまなくアンケートをされたのかを知りたいと思います。いろいろな回答で「参加するのに交通が不便である」というものが多かったから、徳島市内だけではなくて、県下全域から取ったアンケートだと考えるべきなのか、気になったところです。

(事務局)

県下全域で調査させて頂いているのですが、やはり人数的には徳島市にお住まい方のご回答が多い状況になっております。

(委員)

それと、関心が無いという回答が3割くらいいらっしゃる。関心が無いから自由に時間が取れないとか、入場料が高いというようになっております。それはやはり、先ほどの年齢層のところで、働き盛りの人が多いからやむを得ないかなと思いますが、団塊の世代の方もすごく多い状況ですので、そのエネルギーをどう取り込むかという観点も大事じゃないかなと思いました。

それから、「徳島ペンクラブ」は徳島県の文化人、出身者とかゆかりの人、例えば今年は最後の文士と呼ばれた田中富雄の生誕100年の催しを県民文化祭で行います。今までは、海野十三だとか野上章とか文芸関係の方を取り上げて文化祭をやっておりますが、問2の「どんな文化に興味を持っていますか」というところを見ますと、文芸がものすごく低いんです、2割くらいしかないんです。だから私は、文芸という立場からどのように文化を盛り上げるかということを、今すごく思っております。

もう一つは、「阿波の歴史を小説にする会」で、徳島県の事件とか人々とか出来事を小説にして毎年1冊づつ本を出しておりますが、このように郷土のことを、歴史を掘り下げて史実に基づいて小説にして、毎年出しているところは全国では徳島しかないそう

でございます。

その中で、今年は、藍商の三木家の代々の三木與吉郎さんの話を書きました。その前に藍師の話としては、佐藤平助さんの話を書きました。それで、その読書感想文の募集を行うようになって今年が3年目ですが、いくつか例を紹介します。

東京の映画会社の監督という人から、読書感想文が来まして、何に感動したかという最後のところ、太平洋戦争の時に食料以外は育ててはいけないと言われ、藍は一年草なのでそれで途絶えてしまうっていうことがあったんです。戦争が終わって種が出てきた、憲兵や警察の目を逃れて、命を張って、5年6年、種を取り続けてくれた人がいて、その人の名前が法事の席でわかったっていう最後、そこに感動したと、劇的な結末に圧倒されたっていうことで、ただ「藍」と言っても、「藍染め」が今すごく表にはなっておりますけれども、その藍を守ってきた人という所にも、もっと光を当てて頂きたいし、中身を知って頂きたいと思いました。

もう一人、鳴門教育大学の名誉教授の方からの最後はこう言ってます。ただ単に伝統産業を守れというものじゃなくて、藍で言えば、本物を追求することの、苦悩と犠牲がいかにか大いにかという教訓であるということを言っております。インド藍や化学染料に押されて大変な時期をどう乗り越えてきたのか、この裏の苦労話を、徳島県民が誇りを持って語れるようになったらもっと良いのではないかと思います。

(委員)

私は、2年間藍染めの活動させて頂きました。学生の際はそこまで色々な地域の活動とかは知らなかったんですけども、高校で、いろいろな活動があるのを知って、そういう機会が学生でもっと増えればいいなと思います。学生も一緒に取り組めるものが、これから増えたら良いと思います。

(委員)

先ほどのお話しにありましたように、自分たちに興味があるものを聞いて、それが終わると寝ているという、バレエを一生懸命やってる子は、バレエの発表会に行くし、クラシックやってる子はクラシックに行くんですけど、すごく細分化されてて、横の交流が少ないなと私も感じてます。

多様性があって、組み合わせの文化というか、そういう方法も一つの方法として考えて、全く責任無く言うと、例えば人形浄瑠璃をクラシックで踊るとか、阿波おどりをオーケストラの「第九」の前で踊るとか、逆もあるんですけど、そういうふうの一つの枠を壊して、だからすごく柔軟に考えて、例えば絵を書きながら、後ろにクラシックを流す、ジャズでもポップスでもいいんですけどクラシックの人が思いっきりジャズをやってみるとか、そういう何か、文芸も読みながら後ろの音楽を捉えるとかそういうのであればバレエを踊ってもいいし、阿波おどりを踊ってもいいし、総合的に何か面白いプランニングが出来るとすごく面白いと思います。

また、知り合いの演奏家等が、東京から世界的な方が来ても、とにかくお刺身を食べさせたり、鳴門に連れて行くと「素晴らしい」と、何でこんなにすごいんだと、徳島の人間にはごくごく当たり前なことが、東京の人だと、こんなお刺身を食べるには、銀座

の高級店に行かないとと、そんなお声ばかり聞くんですね。

それと、東祖谷に今、フランスから団体がバンバン来てて、着物を着せてかごに乗せてというすごく面白い取組みを東祖谷ではやっていて、今度、メキシコの友達がメキシコから何人か東祖谷に連れて行く、そこで何が出来るのかプランニングをしてるので、そういう何か、徳島の人間が、徳島の事をもう一回発見するような、

大学でも遍路ウォークていって学生さんと一緒に回るんですが、最初はめんどくさいなっていうんですけど、2番札所から1番札所まで歩いてみたら、地域が見えてきたり、全部名前が「板東」ばかりだとか、そういう徳島の人間が、もう一回徳島の原石であるポイントを見つけ出してアピールできるようになると、中身も面白くなるのではないかと思います。

(委員)

中学校の時に、老人ホームに演奏に行った時の話を少しさせていただきます。

中学校のメンバーと一緒に演奏に行ったんですが、その時に演奏を聴きながら、手をたたいて嬉しそうに楽しそうに聞いてくださったりとか、普段は係の人やスタッフの方には反応しない方も、音楽に合わせて体を動かしたりとか、リズムを取ってくださったり、また涙を流しながら演奏を聞いてくださったり、色々な方がいらしゃって、すごくそれが嬉しくて、それを目の当たりにしたときに、今まで音楽をやってきて良かったなあと本当に思いました。

ですから、これからも地域の方々と交流出来る機会がたくさん増えれば、もっと音楽が、徳島に広がっていくのではないかなと、改めて感じました。

(委員)

神山町は沢山の地域文化、文化財などがある所なんですが、今までは収集に力を入れていたんです。情報の収集であったり、それをいかに保存するかということに重きを置いていたんですが、それをこれからはどう活用するか、それを使ってどう街作りに活かしていくかとを考えたときに、サテライトオフィスを構えているIT企業と協力しまして、その貴重な文化や文化財を、デジタル化して活かしていこうと。

また、文化や文化財を継承する方が、今、減少してきて、それをいかに後世に伝えるかということの問題が出てきているので、それも解消できるということで、去年は神山町の「ふすま絵」をデジタル化しました。

神山町では1400枚を超える「ふすま絵」があるんですが、それを1枚1枚4Kの映像を用いまして映像化し、それも、ただ映像化するのではなくて、「ふすまからくり」を映像を使って再現するということを考えました。

そうすることで、文化とか文化財というのは大人の娯楽というようなイメージが強かったんですが、子どもたちや若い方にも親しみやすいものになるということで、そういう取組みをしてみました。

「デジタルふすまからくり」という、人形芝居の幕間で行われる「ふすまからくり」をデジタル化したものなんですが、人間の動きや物音で「ふすまからくり」が段返しが行われるんですよね、スクリーンに映ったふすま絵が。

自分の意思で動かせるっていうことで、子どもたちも興味を持って楽しんで頂いたんですが、それをこれからもドンドン活かしていきたいと思っております。

新しい楽しみ方というのを、これからも考えたら良いのではないかなと思っています。

(委員)

人形浄瑠璃、すべて後継者不足というか今の時代、特に農村舞台はほとんどが過疎地域にあって舞台を開くにしても地域に人がいない、それで年に1回開くときだけ帰ってきてくれて手伝ってくれる。ただ、開くためには、あぜ道の草も刈らなくてはいけないしその手間がないから出来ないというお話があったりして、農村舞台の会がちょっとお手伝いに行ってどうにか開催にこぎ着けるとかそういうような状況はあります。

人形浄瑠璃振興会も同じく、だんだんといろいろな「座」が高齢化しつつあります。

だから演目も重たい人形持てなくなってまして、時代物の大きい人形は女性が多いですから使えない、この演目は出来ない。それで、今年夏季人形浄瑠璃大会に、時代物という限定をして行いました。

地域に根ざした「座」、後継者をきちんと小学校、中学校、高校と育てている「座」、まあ勝浦町なんですけれども勝浦町はちゃんとそういう順番が出来ていて、OBが勝浦座に入るといことで、ずっと今繋がってきてるのでそういう時代物も出来る。

それは、お客様方には非常に今までと違う人形浄瑠璃を見たということで、非常に好評ではあったんですけれども、先ほどの「能」ではありませんが、非常に観客動員数が少ないんです。

十郎兵衛屋敷でも、クラシック音楽と人形浄瑠璃とか生け花のハドルの時に人形が出てくるとか色んな事をやってみました。今まで、来たことのないお客様が、そういうものを一緒に見ていただいて「人形って面白いな」と思って頂いて、次の普段の人形浄瑠璃に見に来て頂けるかなと、いろいろな年代層、仕事をお持ちの方、興味が違う方々が、人形にも興味を持って頂けるかなと、そういう取り組みもしたんですけれども、やっぱり皆さんの興味は、演奏だけだったりとか、お花だけだったりとか、興味の対象はそこだけであって、次にはなかなか結びつかないようなこともあります。

学校邦楽も観客動員数が少ない。保護者の方はきてますけど、子どもたちの演奏が終わったらどっと出て行く。他の学校の子の演奏も聴いて帰ってくださいとお願いをして、最後まで残ってくれるというようなことですので、観客を育てるという事もすごく大事じゃないかと思います。

(委員)

先ほど資料にあった「あわ三大音楽」であるとか「とくしま藍の日」であるとか、正直、このように、もう一回見ると、「そういえば、こういうことだったな」と言うのはすごく思うんですけれども、普段そういったことって、自分の頭の中にはなくて、言われてみたら「ああそうか」というような事であるので、もっと告知の必要があるのではないかなと思います。

せっかくの「とくしま藍の日」を、もっともっと繰り返しいろいろなところで発信していく必要があるんじゃないかなと思いました。

それと観客のお話が先ほどから色々出てきてまして、先ほど「刀剣」のお話がございましたが、多分「刀剣乱舞」という、すごく人気があるイベントがあって、それを徳島城博物館でもやると、お客さんが県外からもすごく来る。

アンケートで、県外に行っている人があまりいないという回答だったんですが、多分もっともっと魅力的な事が徳島で行われれば、もっともっと皆きてくれると思うし、そすれば、おそらく、自分の目的のイベントだけではなく、観光地にも行くし、おいしいものを食べて、もっともっといろいろな人に、徳島の文化を知ってもらえると思います。

ですので、何かそういった全国からもっと来てくれる、「阿波おどり」とかそういうのではなくて、短期的なものでもいいから、「マチ★アソビ」で成功しているように、そういったものを、皆で考えていけたら良いのではと思いました。

(委員)

アンケート問4で「見たい展覧会がない」とか言う回答がありまして、全く私も同感でして、お金を払って見たいと思うものが、本当に徳島にはないというのが実感です。ただ、どんな時間を掛けても休みをとってでも、県外に行きたいと思うものが、県外にはあるわけです。

そこが本当にちょっと悲しいかなというところがあって、それは展覧会だけではなくて、実は映画館とかもそうなんです。去年、ようやく県庁所在地に常設館が出来たんですけど、結局、北島町でやってるものと大差なく、本当に見たいディープなものは見れないために、県外に出かけていくことになる。

その辺のターゲットが、もっとちょっと、実はニッチに向いて行くべきで、もう少し偏ったものこそが、「文化の芽」というか、そうしたものを育てていくはずなので、最大公約数の文化ではなくて、もっと偏ったものを模索してもいいのではと思っています。

先ほど「マチ★アソビ」とか、色々話題が出ていましたが、これも街のブランド化のために、すごく、年二回やってるときは集客が確かにあるなという実感はあります。ただ、その期間を除くと何事もなかったかのような状況というのが歴然としているわけですし、他の流行っている地域と何が違うのか考えると、やはり街のブランド化が弱いと思います。

例えば鳥取県ですと、空港にコナンと鬼太郎の2大漫画のタイトルがついてる強烈な県ですが、境港市に鬼太郎ロードありまして、そこに行くときに本当に水木しげるの街じゃないかというくらい、店がずっと連なっていますが、一つポイントとなっているのが、キャラクターの像が点在しているんです。

同じ事が、先日、新潟に行きますと、水島新司の出身地ということで「ドカベンロード」というのがあって、そこにもキャラクターの像が点在している。

このように、いつ行ってもあるというものが、必要なかなと考えてまして、徳島に入ってくる観光客が、徳島で泊まらない理由は、そこにあるんじゃないかと思ってます。

最近、ベトナムがすごい力を持ってきたということで、例えば、橋に龍をかたどって、土日の夜には、その橋の上の龍の口から火や水が噴くとか一つイベント化がされていて、国外からの観光客のみならず、地元の人にも憩いの場所になっていると聞きます。ドラゴンブリッジと呼ばれているらしいのですが、そのように、もう少し常設のポイント

があつたら良いと思います。

あと、情報発信の仕方に関連して、最近は、雑誌などから情報が入っていくのではなくて、自分が欲しいものを能動的に求める訳なんですけど、検索で入手する時代ですから、それまで自分が培ったワードというか生活様式の中からしか、実は、検索用語は出てこないんです。ということで、幼少時から持っているもので、ある程度これからの情報の入手の先は決まってきている時代ではないかと考えます。

そこで、心に引きつけるといふ「フックする」というキーワード。例えば「V S 東京」、向かってる感じが、私には有りすぎてびっくりしたんですけども、そういう尖った表現でPRしていくことが必要ではないかと考えています。

(副会長)

たくさんの意見がありまして、まとめみたいな形になるかも知れませんが、まず資料5の関係、やはり「あわ文化」の更なる振興発展ということで、先ほどから出ております「4大モチーフ」等々、文化って、やっぱり分野を融合していく、これが新しい文化にイノベーションを生んでいくのかなと、このポイントは一つ大事なことでないかと思っています。

それから、文化芸術の活用等について、先ほどからお話がございますようにいわゆる観光とか産業とのコラボ、それをいかに定着させるか。やはり文化というのは、自立性を持った形で再生産といいますか、活動していかないと、お金の切れ目が文化の切れ目になってはいけないと思うので、そこはやはり、観光とか産業とマッチングすることによって、ある意味お金を稼ぐという部分も考えていく必要があろうかと思っています。

それから、新たな文化芸術についてということで、先ほど会長からもお話がございましたけども、やはり徳島というのは光LEDですね、そういったことでその光を使った新しい文化が今出来つつあるかと思っていますので、それも一つ入れていかれてはどうかと思っています。

次代を担う人材育成では、学校教育の話もありましたが、小・中・高・大、大学院もありますけど、基本的にちょっとバラバラ感があるような気がしますので、そこを一気通貫じゃないですけど、継続性を持って大学まで繋げていくということが一つポイントになるのではと思います。

また、新しい若者が、次世代を担う人材を育てないという話がありますが、そこは知的好奇心を呼び込むような、あるいは次世代技術の振興にあてる、後から自分の仕事にも役立つといった、そういった夢を持たすことが大事ではないかと。本学でも、学生が参加して、3Dプリンターを用いて人形浄瑠璃の人形をつくっていますが、そうした体感によって、今度は逆に、伝統芸能にも帰るってくるのかなという気もしていますので、そうしたことも考えてもらいたいと思います。

(会長)

どうもありがとうございました。皆様方からいろいろな意見をいただきました。

また、議事録を御覧になって、今日の議論を踏まえまして、次回以降、諮問に応えられるよう議論したいと思います。以上で審議を終わります。